

2-4. いわゆる「尻上がり」イントネーションの実際と「ステレオタイプ」

ここでは、はじめに実際の談話に現れたいわゆる「尻上がり」イントネーションがどのような幅、バリエーションを持っているかについて、2-2の方法により作成したピッチパターンから観察する。次いで、原(1993b)の知覚実験の結果を再検討し、当該イントネーションを伴う発話から受ける印象が、これらの音声とどのように関係しているのか明らかにする。すでに、井上(1994, 1997)、原(1992)で当該イントネーションを伴う発話が「甘え」や「幼さ」などの印象と結びつくことが聞き取り実験により確認されている。ここではさらに、これらの印象が音声のどの要素によってもたらされるのかについて明らかにする。そして2-3で明らかにした当該イントネーションの実際の機能や使用状況と当該イントネーションに対する印象(の一部)が、いかにかけ離れているか明らかにし、また、なぜそうであるのかについて考察する。

2-4-1. いわゆる「尻上がり」イントネーションの音声上のバリエーションとその認知

図Ⅱ11-1~3は、それぞれ同一人物の実際の談話に現れた当該イントネーションのある句末2拍のピッチパターンである。ただし、比較しやすくするため、句末から第2拍の開始時をX軸(時間軸)上の-1にし、句末拍の長さは句末から第2拍を1としたときの相対的な長さで表してある。つまりX軸上のプラスの数値が句末から2拍目の拍長に対する句末拍の相対的長さである。Y軸はピッチの実測F0値を先の近似式(2-2-5)によりmel変換した後に、話者ごとに標準化した値を示した。

図Ⅱ11-1の読み上げ音声のパターンに比べ図Ⅱ11-2、3の談話における発話のパターンは、同一話者の発話でしかもアクセント型が近いものであっても、より変化に富んでいる様子がわかる。

図Ⅱ12は次章で詳しく述べるが、判別分析によって得られた判別関数値による他のイントネーションも含めた全体の散布図である。いわゆる「尻上がり」イントネーションは、ある程度まとまって分布してはいるが、他のイントネーションの分布と明確な境界が引けるわけではない。ただし、これは統計上の分類であり、知覚境界と完全に一致するとは限らない。

当該イントネーションの認知については、すでに井上(1992a, 1993)や原(1993b)で聞き取り調査が行なわれている。この井上(1992a, 1993)の調査は、テレビで放送された高校生の討論など数人の音声を聞きながら、それらの音声の文字化資料中の各文節末について、そこが当該イントネーションだったかどうかを記入していく、という方法で行なわれた。被験者は東京外国語

図 II 11-1 30代女性の読み上げ音声中の「尻上がり」イントネーション発話例

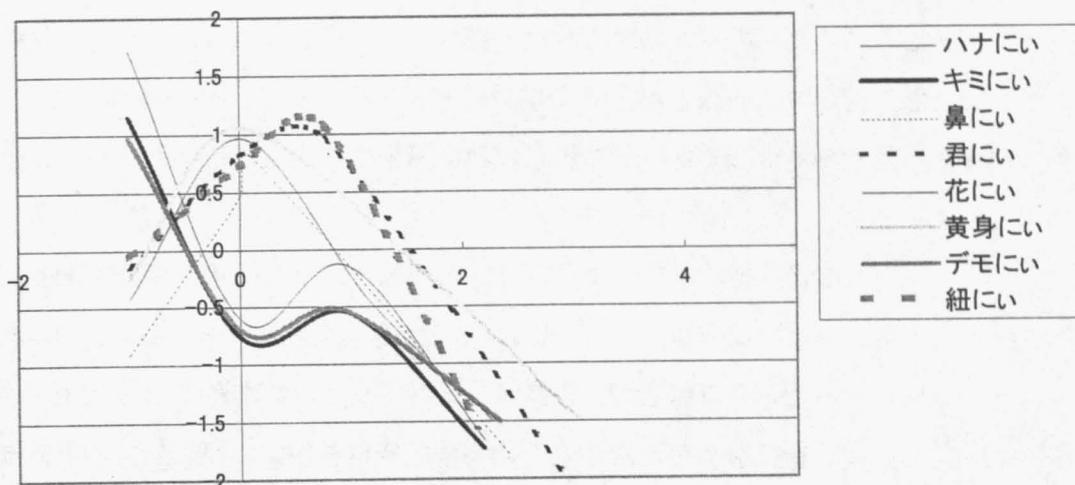


図 II 11-2 女子高校生の談話中のいわゆる「尻上がり」イントネーション発話例

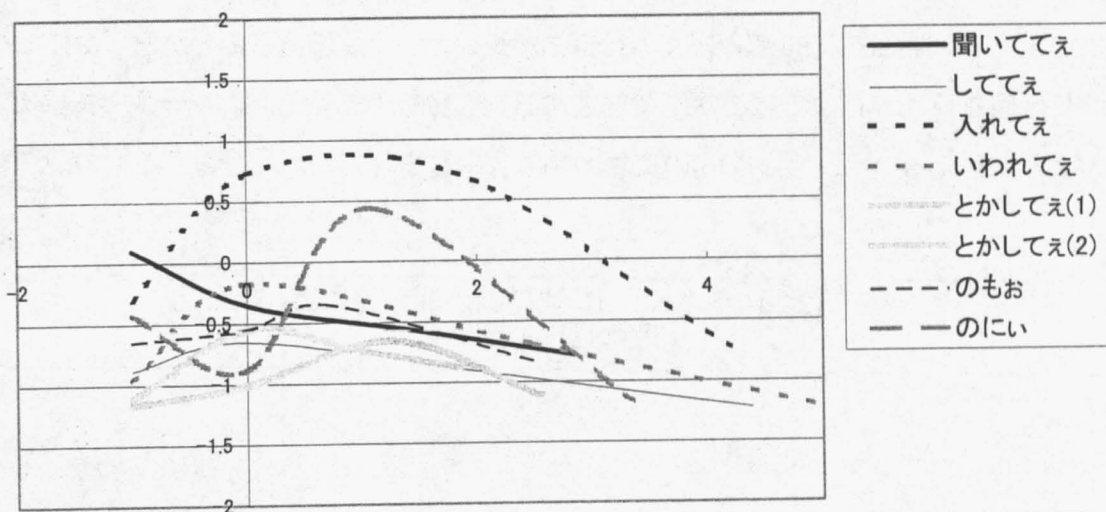
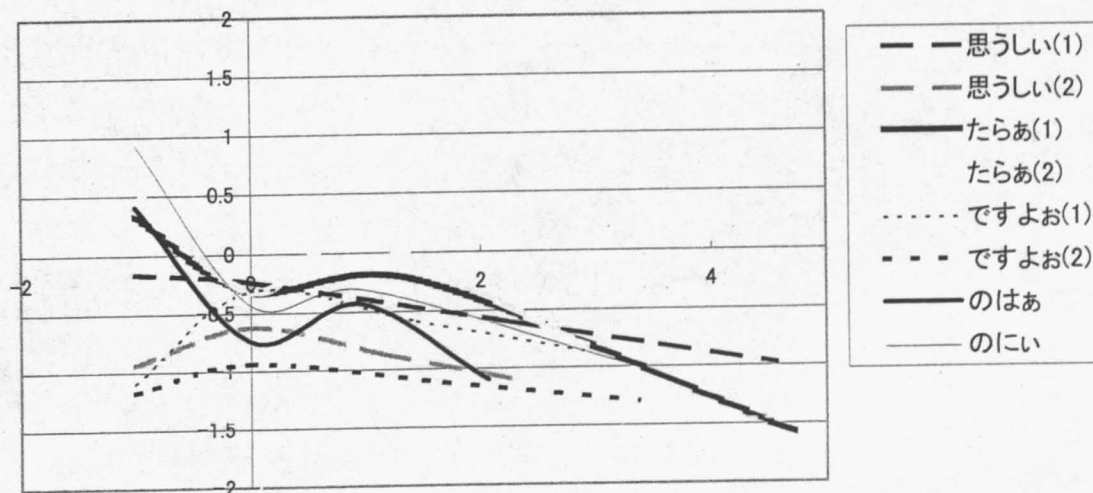


図 II 11-3 男子高校生の談話中のいわゆる「尻上がり」イントネーション発話例



大学の大学生及び大学院生、計 84 人であった。調査の結果、被験者全体の 7 割強が当該イントネーションであると認めたものは、発話された一部の文節に過ぎなかった。そして当該イントネーションであると認知する被験者が全体の半数にとどまるものや、「中間的である」と判断する被験者が多かったものも数多くあり、これらは特に男子生徒の発話に多く見られたという結果が報告されている。

この結果から、原(1993b)は、当該イントネーションの認知においては中間段階があり得ること、また当該イントネーションかどうかの判断には「尻上がり」イントネーションという名称が影響している可能性があることを考慮して、当該イントネーションの名称を伏せた上で、当該イントネーションの典型的音調を明らかにするため、合成音声を使い、「私があ」の下線部分のピッチを様々に変化させ被験者に聞かせる実験を行った。この結果、同一話者の場合に限って言えば、当該イントネーションとみなされやすい音響的特徴は、当該拍の F0 値の落差が大きい点に加え、下降開始時の F0 値が高く、当該拍が長いという点にあることが明らかになった。この結果は図 II 13 で示すように、次章で詳述する判別分析の結果ともよく一致している。

そのように言えるのは、原(1993b)の実験の刺激音に含まれていた「上昇」するもの(図 II 13 の

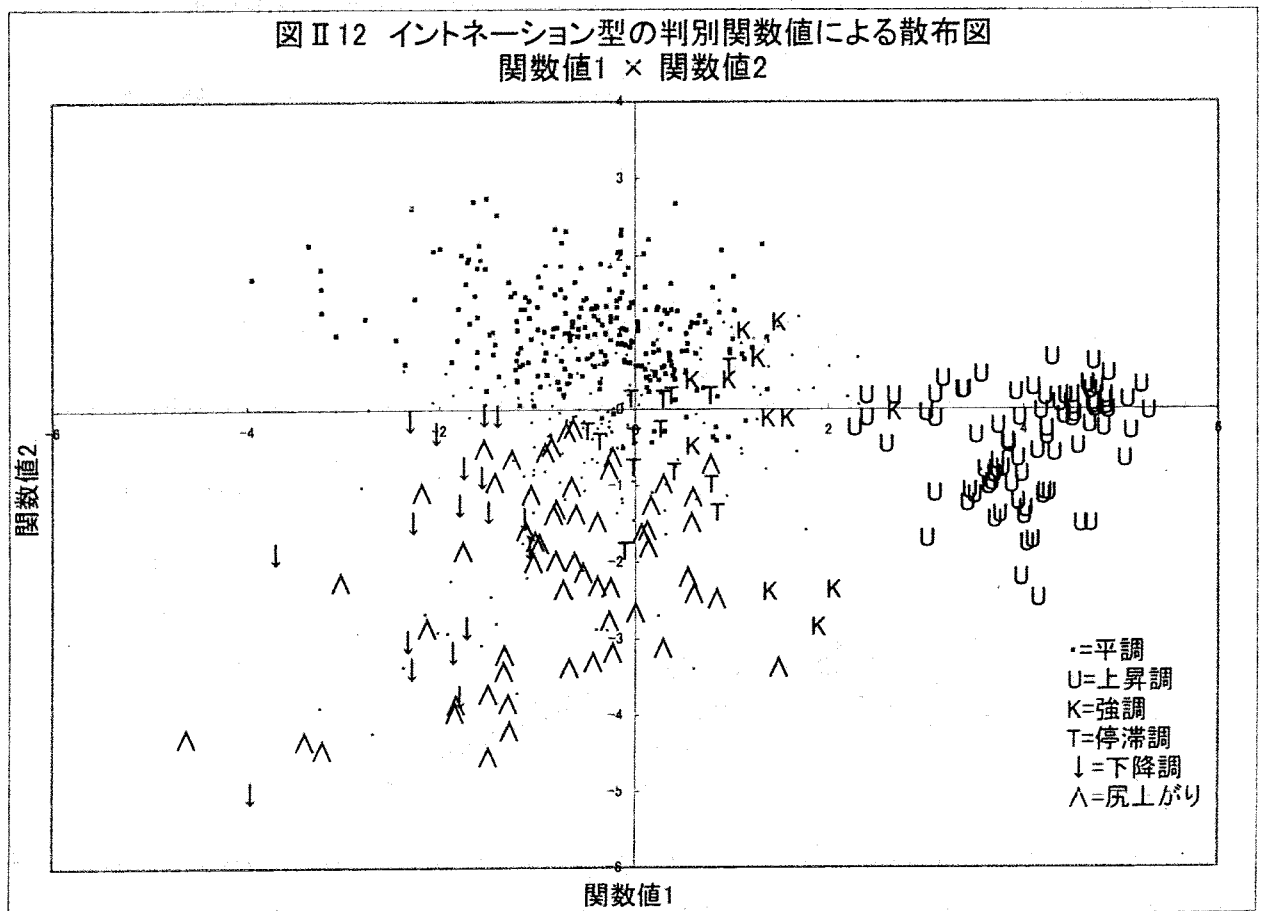
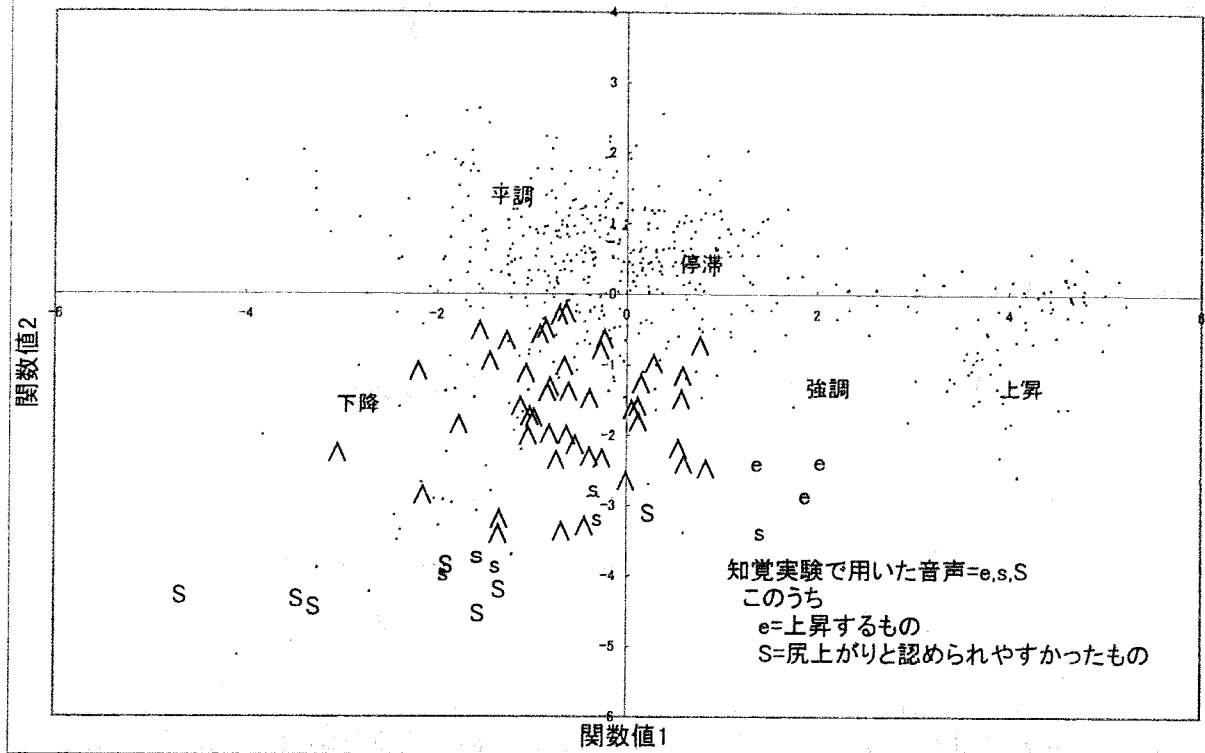


図 II 13 イントネーション全体の散布図中における知覚実験の刺激音の分布
関数値1 × 関数値2



e)は「強調」に近いところに分布し、逆に多くの被験者に「尻上がり」だとみなされたもの、つまり典型的な「尻上がり」イントネーション(図 II 13 の S)は、他のイントネーションと紛れない位置に多く現れているからである。この図からも統計上の分布と聞き取り実験の結果は、それほどかけ離れたものでないことが確認できる。

井上(1997,p.157-159)が指摘するように、実際の音声談話における当該イントネーションは、「中止・継続を示すという機能では音韻的に同じものについて、音声的な実現に様々な段階がある」ことは確かであり、たとえ同一人物の発話であったとしても、実際の談話場面での当該イントネーションの認知は単純に当該イントネーションの音響的な特徴(絶対的なピッチの高さの比や差など)だけが影響するわけではない。この点は原(1993a)でも確認されている。

しかし、井上(1997,p.160)が「尻上がりイントネーションが音声的实现において中間段階を含み、一見非離散的・連続的にみえても、それは本質ではない。文末の文法機能を持つ他のイントネーションと比べる形ならば、あるかないかの離散的・2 値的な作用を示すと考えられる。」と指摘している点は図 II 12 及び図 II 13 から明らかだと言えるだろう。ただし、先に述べたように、イントネーションの離散性の問題は、もう少し吟味する必要があると考えられるので、第 5 章で再び検討する。

当該イントネーションの認知が聞き手によって大きく異なった原因は、当該イントネーションのパターン自体に様々なバリエーションが存在することが挙げられるだろう。そして何よりも、「尻上がり」イントネーションに対する、聞き手の様々な主観やステレオタイプのために、純粹に音響的な「昇降調」パターンだけに目を向けることが困難であったという点も看過できない。これはある意味で、この名称によって指示された現象が、単に物理的、音響的存在としてのイントネーションだけではなかったことを表しているとも言えるだろう。当該イントネーションに付随する様々な現象に関しては以下に詳述する。

2-4-2. いわゆる「尻上がり」イントネーションの印象を決定する要因

ここでは、数人の話者のいわゆる「尻上がり」イントネーションを伴う発話について、どのような印象を受けるかを調べた井上(1994、1997)及び原(1992、1993a)の調査結果から、当該イントネーションを伴う発話がどのような印象と結び付くのかについて明らかにする。そしてそれらの印象がどのような音響的特徴によってもたらされたのかについて考察を加える。

これらの調査は井上(1994)に紹介されているように、当時の東京外国語大学大学院生であった長嶺明子氏、唐津麻里子氏、山口聖子氏らによってレポートの付随資料として提供された調査票をもとに、同大学大学院生を対象に行われたもので、被験者に刺激音として 11 人の短い発話を聞かせ、11 人それぞれの発話の印象や発話者の年齢、よく聞くか、自分が使うかななどを尋ねたものである。このうちの 8 発話に関しては以下の図 II 14-1~8 にそのピッチパタンの一部を示した(資料 C 参照)。太字部分の当該イントネーション箇所は、ピッチパターンも濃く示してある。

図 II 14-1 50代男性の発話

ま今言ったようなあの一電流を流してね

というようなものになるとお私なんかはあ

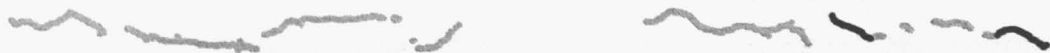


図 II 14-2 20代女性の発話

毎日過ごさなくちゃいけないという枠組みを与えられるわけで



図 II 14-3 10代女性の発話

自分の世界になんでもこもってしまうとお 周りのこと気が付かないからあ



図 II 14-4 40代女性の発話

この場で あの 検討するのはあ 失敗するよなあ安易な医者のことじゃなくてえ



図 II 14-5 50代男性の発話

まあ右脳を活性化したりする っていうのはあると思っい…



図 II 14-6 10代男性の発話

例えば 席が 何個かあってえ そん中で暮らす、あの一暮らすって…



図 II 14-7 10代女性の発話

人間的なことは 親を 手本にしてもいいんですけどお 生き方としてはあ



図 II 14-8 10代女性の発話

けれどもあ やっぱ私があ ふなばしに仕んでてえ ふなばしに に関して



図 II 14-9 70代男性の発話



調査はこれらのピッチパターンで示したような短い音声を繰り返し聞きながら、被験者がそれぞれの発話に当該イントネーションがどの程度あったかを「たくさんある」、「少しある」、「あまりない」、「まったくない」から、また「かわいい」、「幼い」、「ふてぶてしい」などの印象についても同様に「大変」、「少し」、「あまり」などの選択肢から選び調査票に記入するという方法で行われた。井上(1994)はこの調査結果を林の数量化理論第3類や因子分析で詳細に分析した。これによれば、当該イントネーションの使用が聞く者に対して「甘え・幼さ・軽薄な」などの印象を与え、発話者の年齢も若く思わせる一方、「知的・丁寧さ・説得力あり」などの好感を与えることは少ないという。また当該イントネーションには、「甘え」や「かわいい」と相反する「ふてぶてしい・乱暴」な印象が結び付くこともあるが、これは当該イントネーションの持つ、継続・持続を積極的に表示する談話機能に起因すると指摘した。ただし、この調査の被験者は、井上(1994)で明らかかなように言葉に敏感な、ある意味で特殊な集団であるといえるだろう。

そこで、被験者層を拡大するべく原(1992, 1993a)では高校生約270人、中学生の母親35人に、原(1994a, b)では茨城の中学生約60人、その父兄約50人に対象を広げ、同様の調査を行った。またこれらの調査では、発話の「尻上がり」イントネーションの出現状態について、その程度と頻度に分けて問い、使用場面や使用意識に関する設問も加えた。井上(1994)で指摘されたように「です・ます」体による影響をなくすため、刺激音声も改良した。さらに茨城での調査(原1994a, b)では茨城出身者の発話に聞かれる北関東方言の、いわゆる「尻上がり調子」を刺激音(図II 14-9)に加え、いわゆる「尻上がり」イントネーションに対する反応との違いを探った。

これら原(1992, 1993a, 1994a, b)の諸調査を踏まえ、当該イントネーションを伴う発話がどのような印象をもって聞かれるかについて、以下に改めて述べる。

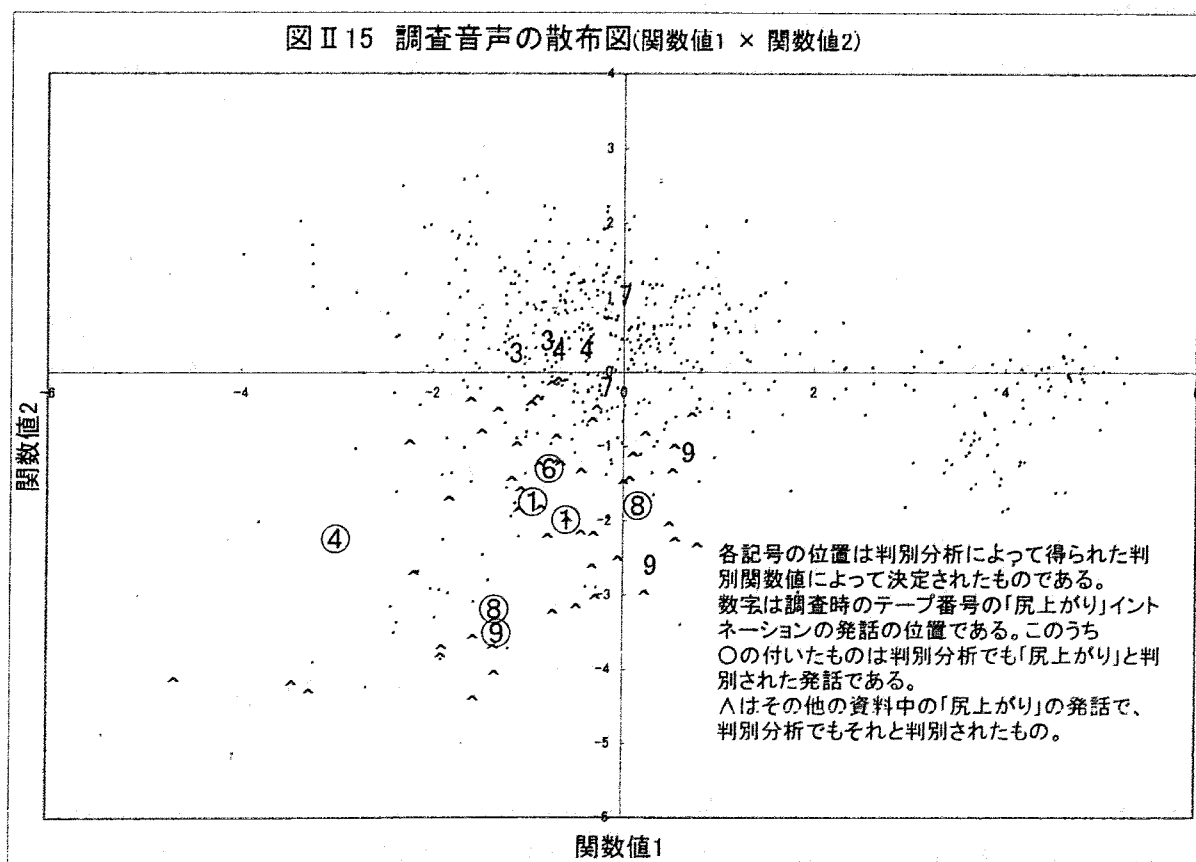
はじめに原(1992, 1993a, 1994a, b)の調査で使われた刺激音である9人分の短い発話のピッチパターンを図II 14-1～9に示す。図II 14-9以外は井上(1994, 1997)でも用いられた音声の一部である。一方、図II 14-9に示したNo.9の音声は、原(1994a, b)で報告した1992年の茨城での調査時のみ刺激音として用いたものである。北関東のいわゆる「尻上がり調子」が現地の人にどのように認識されているか、いわゆる「尻上がり」イントネーションと区別されているかを確認するた

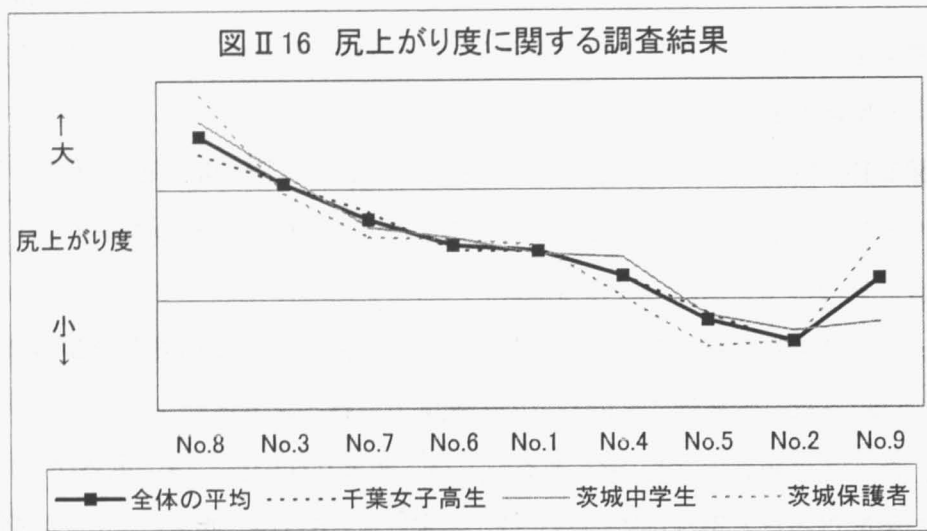
め新たに加えた。父兄の方は北関東の「尻上がり調子」を当該イントネーションと混合して聞き取る傾向が中学生より強く見られたが、中学生はいわゆる「尻上がり」イントネーションとは別のものと捉える傾向が強かった。

さらに、図Ⅱ15 に他の音声資料とともに判別分析を行った際の散布図を示す。当該イントネーションであると正しく判別されなかったものもあるが、概して他の当該イントネーションの発話分布域と重なっている。

次に No.1~9 の話者それぞれの発話の「尻上がり度」に関する調査結果を図Ⅱ16 にまとめる。なお「尻上がり度」とは、各発話にどのくらいの頻度で当該イントネーションがあったと思うかについて「1、たくさんある」、「2、少しある」、「3、あまりない」、「4、全然ない」から、そしてそれがどの程度だったと思うかについて「1、非常に大」から「4、非常に小」の4段階から、それぞれ一つ選択してもらい、各回答を点数化した上でテープの話者ごとに算出した頻度と程度の平均点である。

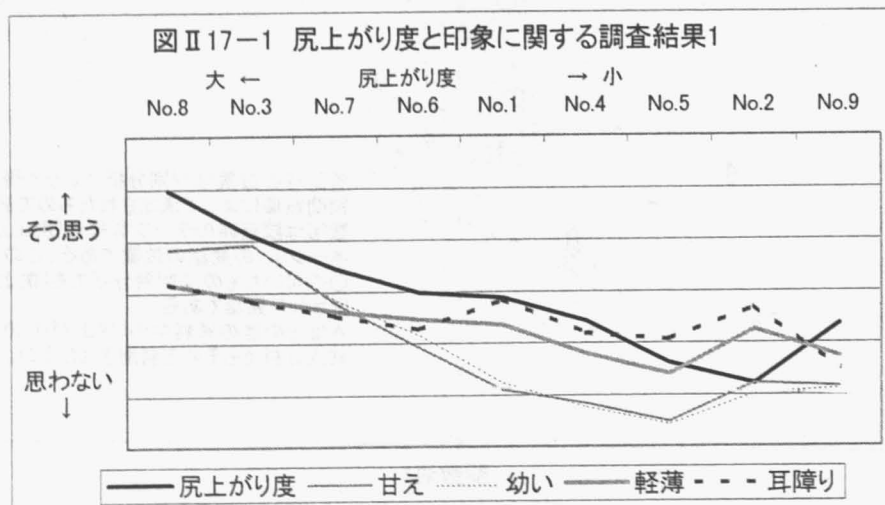
図Ⅱ16 は、筆者が1991年に千葉県の高中生及び中学生の母親を対象に行った調査と1992年に茨城県の中学生及びその父兄を対象に行った調査の結果である。ただし、中学生の母親は被験者が少なかったこと、調査項目が他と比べ少なく条件がかなり異なることから、ここでは除

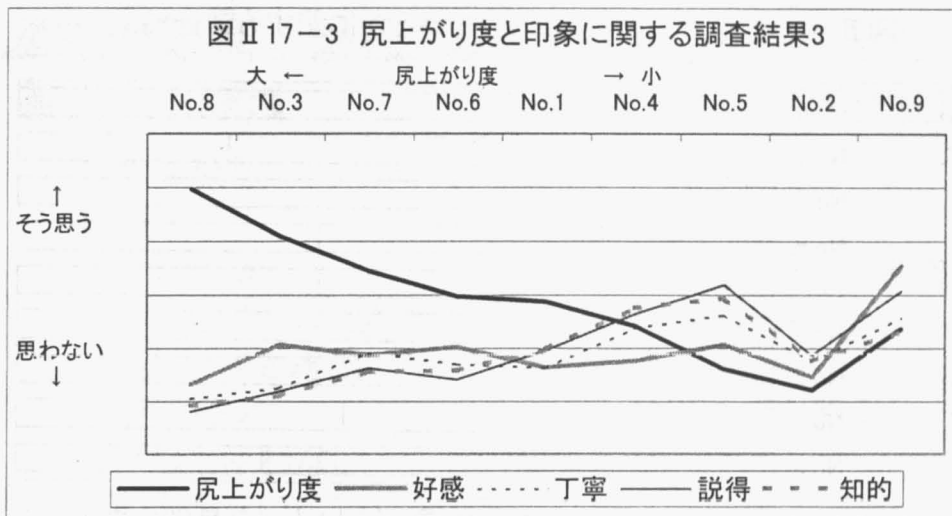
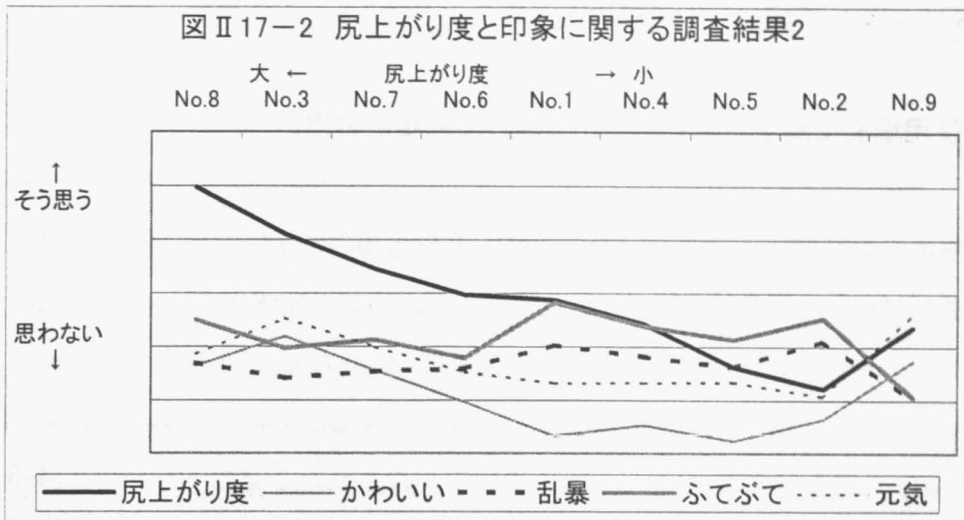




外した。刺激音 No.1~No.8 の音声については、千葉、茨城両調査に共通だが、刺激音 No.9 は茨城の調査でのみ用いた。これに対する「尻上がり度」の認定に顕著な世代差が見られたため、茨城調査の結果は中学生、父兄の結果を分けて表示した。しかし、調査の結果得られた各話者の「尻上がり度」と、それぞれのピッチパターン(図 II 14-1~9 参照)や先の判別分析の結果を比べると、実際は必ずしも相互に関連があるわけではないことは明らかである。当該イントネーションが一つも現れないもの(No.2=図 II 14-2、No.5=図 II 14-5)についてさえも「全然ない」という回答は全体の3割に満たなかった。これは当該イントネーションが実際のピッチによってのみ、それと認識されるわけでないことの一端を示していると考えられる。

次にそれぞれの発話に対する被験者の印象に関する調査結果について図 II 17-1~3 を見てみよう。図 II 17-1~3 は図 II 16 と同様 1991 年の千葉での調査と 1992 年の茨城調査の結果を示してある。被験者によって「尻上がり度」が高いとされたものほど、概して「幼い」、「甘えている」、





「かわいい」、「軽薄」などの印象が強くなる傾向が見られる一方、「知的」、「説得力がある」などの印象は弱くなる傾向が見られる。これは先に見た井上(1997, 1994)の結果とも共通する。いわゆる「尻上がり」イントネーションが様々な印象と結び付くことは以上見てきたように明らかだが、その前に、いわゆる「尻上がり」イントネーションであるかどうかの判断があり、それは必ずしも音声パターンに現れるような音響的特徴によってのみ決まるものではないことも明らかである。つまり当該イントネーションかどうかの判断は単に F0 値などの音響的特徴だけによるのではないということである。

このような数値で表せる音響的な特徴以外の要因(例えば話者の声質や話者に対する聞き手のイメージそのものなど)も当該イントネーションの認知に深く関わっていることがこれらの調査から確認できた。

次に当該イントネーションの使用場面に関する調査結果をもとに、当該イントネーションの

認知にかかわる音響的特徴以外の要素が何であるか考察する。

2-4-3. 使用場面に関する調査結果と実際の使用場面の違い

はじめに使用場面に関する調査(原 1992, 1993a, 1994a, b)の結果について図Ⅱ18-1~3 を見てみよう。図Ⅱ18-1~3 は図Ⅱ16, 17-1~3 と同様だが、No.0, No.9 に関しては先述の通り、千葉では調査していないため、茨城の調査のみの結果である。ただし図Ⅱ18-3 のNo.0 は「尻上がり」の典型例だと説明してから被験者に聞かせた No.8 と同じ話者による別部分の発話である。図Ⅱ18-1, 2 から、「尻上がり度」がもっとも大きいとみなされた2発話(No.8=図Ⅱ14-8 と No.3=図Ⅱ14-3)は、「親しい人」を相手に、「普通の」場面で話されたものだと考える被験者が、それ以

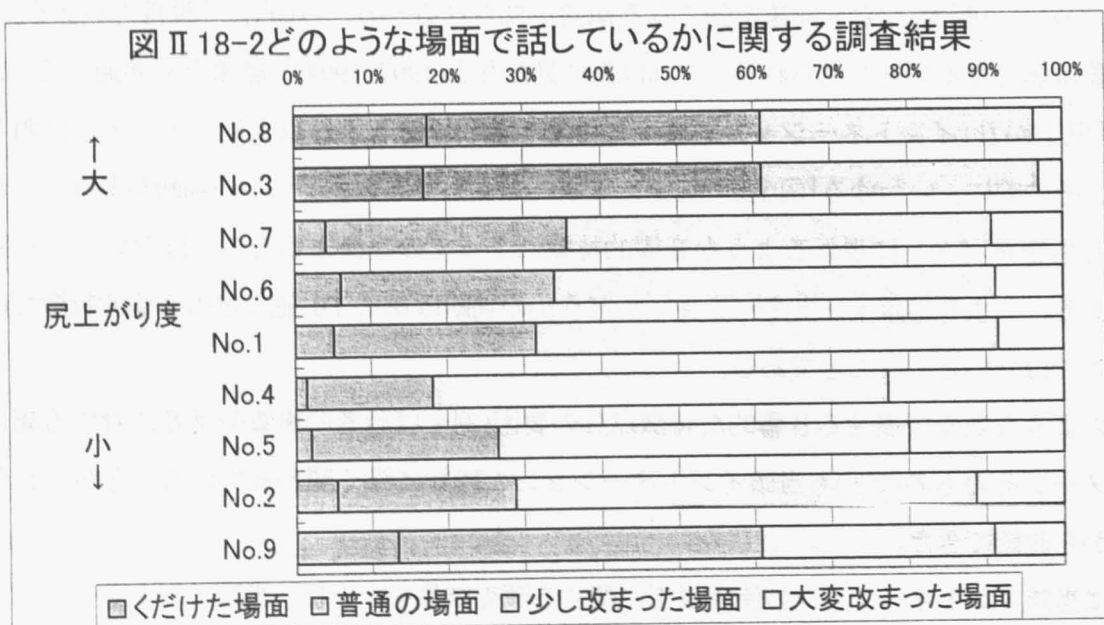
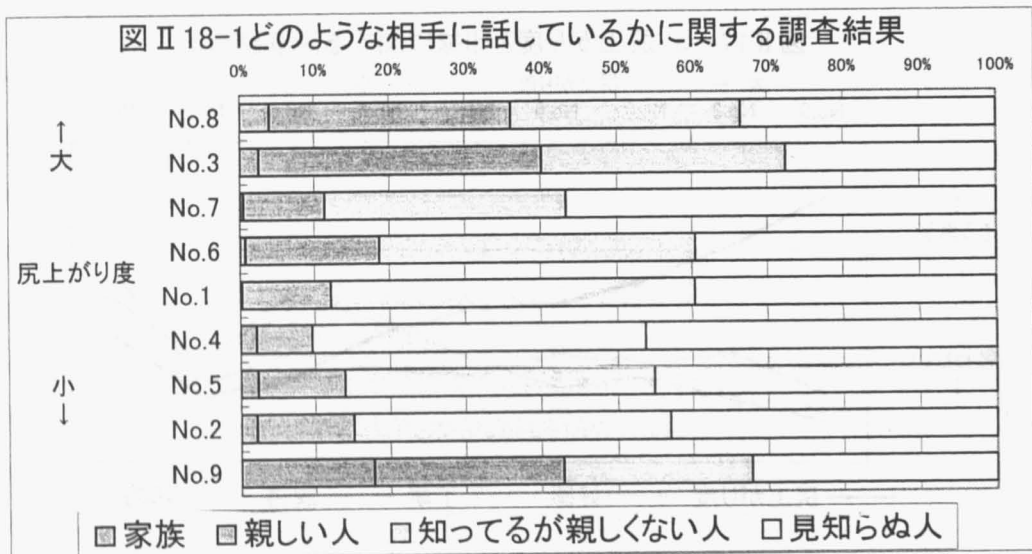
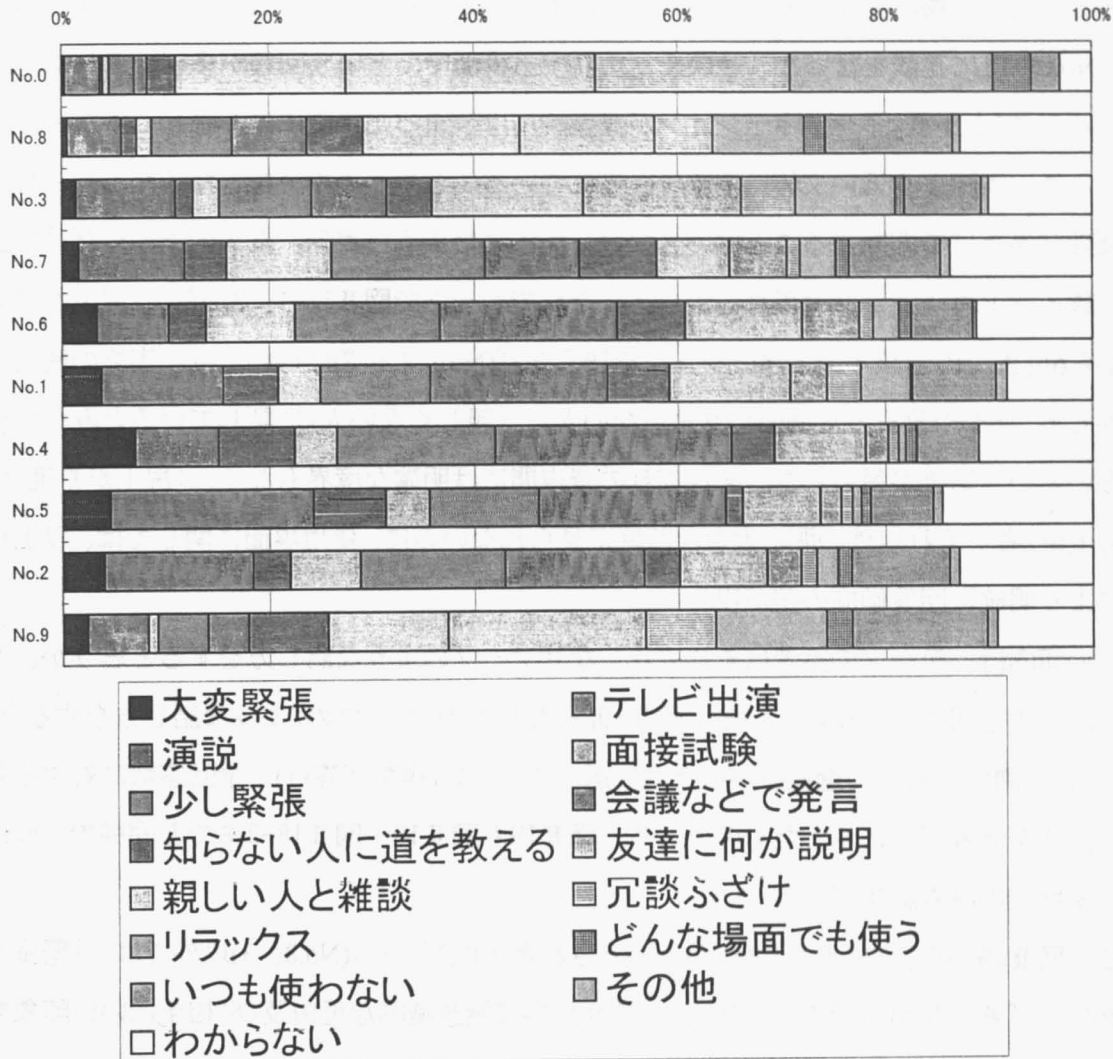


図18-3 「自分ではどんな場面で使うと思うか」に関する調査結果



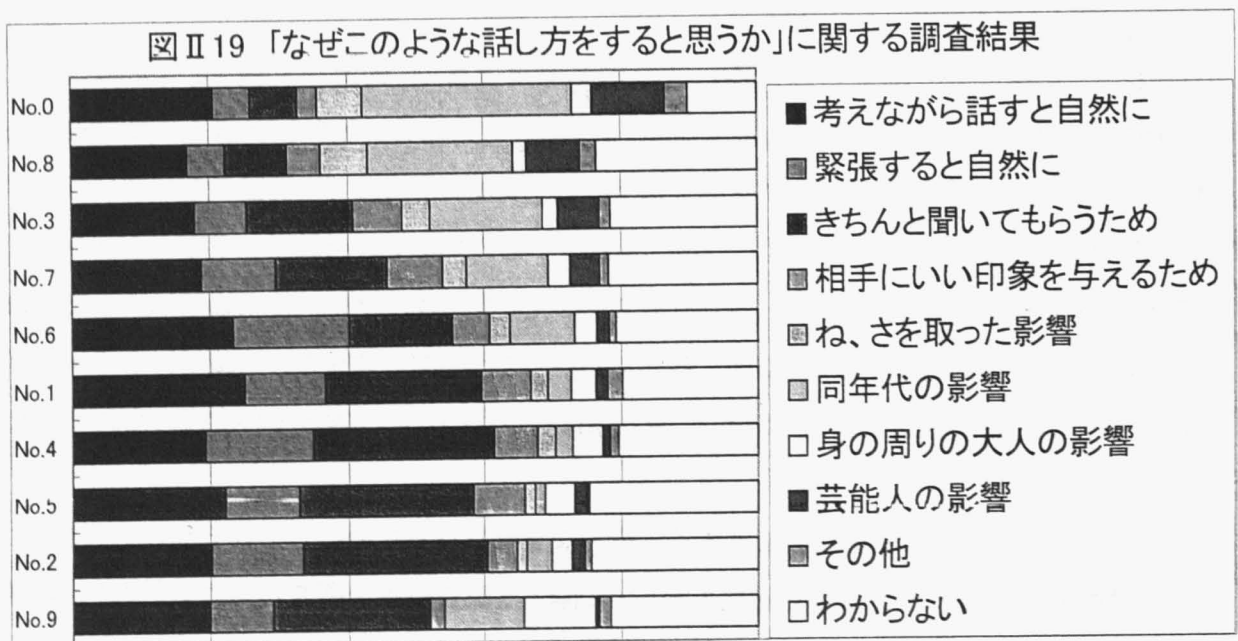
外に比べてかなり多いことがわかる。これは北関東方言の「尻上がり調子」で発話されたNo.9(図II 14-9)の使用場面に対する回答傾向により近いと言える。No.8もNo.3も実際は他の発話者と同様、テレビの討論番組やインタビューなど、改まった場面での発話であったにもかかわらず、概して改まりの度合いが低いと感じられているのである。当該イントネーションを伴う発話が「幼い」、「耳障り」な印象と結び付くことは先に見た通りだが、使用場面に関しては改まりの程度が明らかに実際より低く捉えられている。これはある意味で、当該イントネーションは改まった場面で使われるべきでない、現れるはずがないという被験者の意識の表れではないかと考えられる。

さらに、より具体的な使用場面に関する一般的な意識を見るために、それぞれの話し方について、被験者自身はどんな場面で使うと思うかに関する調査結果を図II 18-3にまとめた。図中

のNo.0は、先述の通り「尻上がり」の典型例と明言して聞かせたNo.8と同じ話者の別部分の発話である。同一人物の発話であり、音声的に顕著な違いは見られないと考えられるが、No.0の方が、No.8以上に冗談を言ったり雑談をしたりする場面で、という回答が多い。これは一般に、いわゆる「尻上がり」イントネーションが典型的には改まった場面にはふさわしくない形式だと考えられ、実際より低い文体に位置付けられていることの一つの証左となるだろう。だが、この調査結果だけで即断することはできない。先に見たように実際、友人同士のくだけた会話にも当該イントネーションは現れるからだ。それでも一方で図Ⅱ18-1、2から、「尻上がり度」が3位から6位までの当該イントネーションを伴う発話(No.1、4、6、7)については、実際の使用状況を反映して、「やや改まった場面」で「知らない人」、「親しくない人」に話しているとみなす被験者が多いという結果が得られた。それぞれの音声間には明確な境界もなく、「尻上がり度」の認定にも上位2者とそれ以外の間には大きな断絶が見られないのに、使用場面に関しては、以上見たようにより明確に回答傾向の差が現れた。

この傾向は、テープの話者はそれぞれ、なぜテープのような話し方をすると思うか、という問いに対する回答にも現れている。図Ⅱ19は「なぜこの(テープの)ような話し方をすると思うか」という問いに対して選択肢から自由に選んでもらい(複数回答可)、全回答数に対する各回答数の割合を話者ごとに示したものである。図Ⅱ19も図Ⅱ16～図Ⅱ18-3までと同様で、No.0、9のみ茨城での調査結果である。

この図Ⅱ19から、「尻上がり度」が高いとされた上位2ケース(No.8、3)以外では、「緊張すると自然に」と「考えながら話すと自然に」を併せた半ば無意識的な理由及び「相手にいい印象を与え



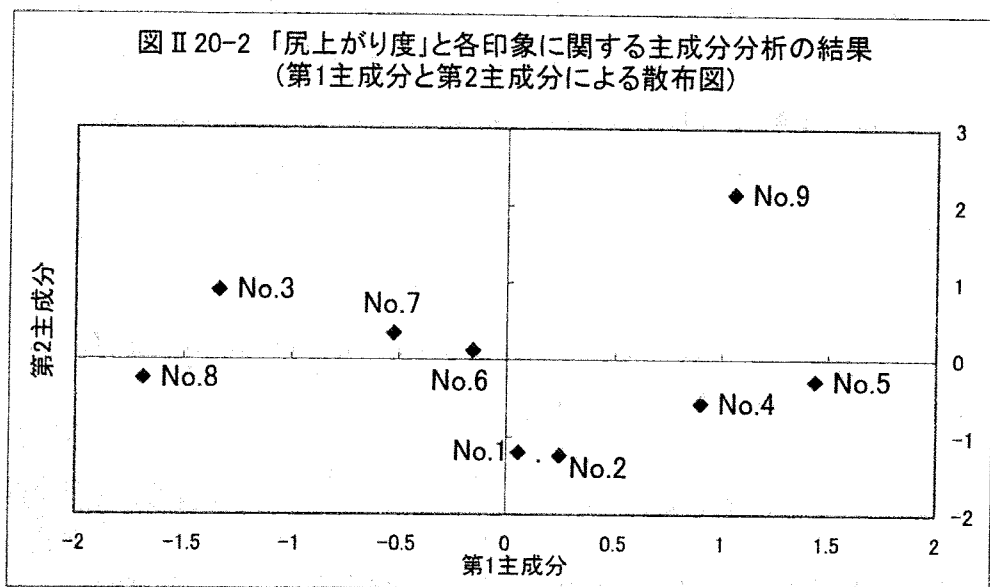
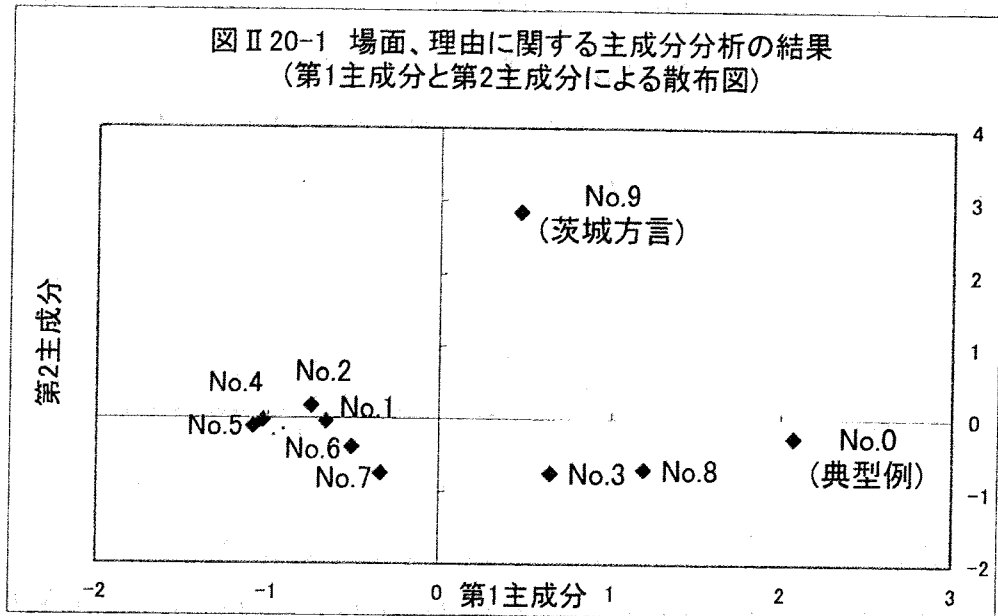
るため」と「話しをきちんと聞いてもらうため」を併せたやや意識的な理由を挙げる被験者が多く、これらの回答が全体の半数以上を占めていることがわかる。一方、「尻上がり度」が高いとみなされた2ケース(No.8、3)は、当該イントネーションの典型例である No.0 に対する回答と同様、「同年代の皆がそうだから」や「芸能人の真似から」という、いわば他人からの影響を理由に挙げる被験者が他に比べて多い点が特徴的である。同じく改まりの程度が低く位置付けられた茨城方言発話の No.9 には、「芸能人の真似」という回答は見られない。「尻上がり度」の高い No.3、8 以外についての回答傾向は、実際の使用場面、つまり「何かを説明する」、「考えながら話す」、「少し緊張した」などの場面から考えても妥当だと言える。しかし、No.3、8 に関しては、「親しい人」と「普通の場面」や「くだけた場面」で、という使用場面に対する回答に対応するかのよう、「芸能人の真似」などのより流行語の使用意識に近い傾向を読み取ることができる。いずれも使用場面に関する回答傾向と似て、「尻上がり度」の高い2者とそれ以外の違いが大きいことは、図Ⅱ20-1 に示した主成分分析の結果からも明らかである。なお、図Ⅱ20-1、2 は、上記図Ⅱ16～19 までと同じ調査により得たデータから作成したものである。

図Ⅱ20-1 は、図Ⅱ18-3 で示した被験者自身が使うと思う具体的な使用場面及び図Ⅱ19 で示したテープ話者の使用理由についての選択肢から「その他」と「わからない」を除いたそれぞれの回答数の全回答数に対する割合(%)を説明変数にして主成分分析を行った結果である。第1主成分の寄与率が58.3%、第2主成分14.2%、以上の累積寄与率は72.4%であった。一方、図Ⅱ20-2 は「尻上がり度」と「耳障り」、「幼い」などの印象13項目(図Ⅱ17-1～3、参照)に関するテープ話者ごとのそれぞれの平均点を説明変数にして主成分分析を行った結果である。寄与率は第1主成分59.3%、第2主成分34.9%、累積寄与率は94.2%であった。両者では説明変数値の取り方が異なるため一概に比較することはできないが、「尻上がり度」と各種の印象に関する図Ⅱ20-2 は、場面や使用理由に関する図Ⅱ20-1 ほど、No.3、8 とそれ以外の差異は際立っていない。

いずれにせよ、「尻上がり度」が高いとされた No.3、8 とそれ以外との間に、各種の印象面や「尻上がり度」という主観的評価に関しては明確な離散的な差異を見出すことは困難であるようだ。また、実際の音声パターンや談話の場面や内容にも顕著な差は見られない。

以上の点を総合すると、いわゆる「尻上がり」イントネーションは、典型的には「若い人(特に女性)」の使う「甘えた」、「幼い」、「耳障りな」口調で、「同年代の人や芸能人が使うのを真似」して、「親しい人」と「普通」の場面(改まっていない場面)で使われる(べき)ものだ、と一般に考えられていると言える。このようなイメージは、先に見た様々な当該イントネーション非難の言説を非常によく反映している。特にこれらの調査における No.3、8 の発話に対する反応は、当該イントネーションの典型的なステレオタイプを明確に浮かび上がらせた。しかし一方で、この

2 発話以外に対しては、単なる「昇降調」イントネーションである当該イントネーションとして、実際の使用状況をかなり正確に反映した結果も得られた。このような反応の違いは何によって生じたのだろうか。この点については次に考察する。



2-4-4. いわゆる「尻上がり」イントネーション現象の社会背景

当該イントネーションの出自に関しては、すでに 2-1-2 で述べた。そこでは、当該イントネーションが「ネ・サ・ヨ」禁止運動の影響や、日本語の中で十分確立していなかったパブリックスペースでの話し方の一つとみなされ、積極的に採り入れられたという点を指摘した。また、1980

年代になり、当該イントネーションに関して激しい非難が起こったこともすでに述べた通りである。しかし、そこではなぜ主に「若い人」、特に「女性」の「甘えた」話し方であるとして、非難されるに至ったかについては言及しなかった。ここでは、当該イントネーションの実際の機能や使用実態を超えた様々な意味付けがどのようになされたか、先に見たステレオタイプがどうして生まれたか、なぜ特に「女性」なのかについて当時の社会や日本人の言語生活の変化から考察する。

もっとも早い時期になされた当該イントネーションの指摘の一つは柴田(1977a)であると考えられる。柴田(1977a)によれば「東大紛争のころから、まず女子学生にあらわれたことを記憶している。」という。女性の方が男性より流行の採用が早いのは、言葉についても言えることだから、特に驚くにはあたらない。現在では男性にも、年配層にも使用者がいるし、「流行語」的色彩ももはや見られず、ほとんど誰も何も言及しなくなった。しかし当該イントネーション非難の激しかった 1980 年代は、「ブリッコ口調」、「女子大生口調」などの俗称に見られるように当該イントネーションの使用者の代表は「若い女性」とみなされる傾向は非常に顕著であった。例えば江國(1989)はエッセイの中で「若いものたち、とくにギャルといわれる小娘たちが口をひらけば語尾を不必要かつ不自然にひっぱる、あの気色悪い語法(当該イントネーション*筆者注)…」と述べ、「家庭で母親が、幼稚園で若い保母さんが、毎日でエでエ、いってれば、…」と続き、おもに当該イントネーションが女性に特有の現象であるかのように述べている。さらに中尊寺(1988)も、若いOLの生活を綴ったマンガの中で、主人公のOLの話す言葉や当該イントネーションを母親がたしなめる場面を描いている。ちなみに1979年に行なわれたNHKの調査で若い人の話し方の調子(当該イントネーション)についての質問の際使用されたテープも若い女性(図Ⅱ14-7の話者、図Ⅱ16以降のNo.7の話者)の音声収録されていた。「甘えている」や、「幼い」といった印象だけでなく、なぜ「若い女性」というイメージが強調されたのだろうか。

この問題を考える前に、一般的な言葉や言葉遣いに関するバッシングがどのようなものであるかについて考えてみる必要があるだろう。これらのバッシングには、より言語的な側面に対するものと、より社会的な側面に対するものとがあると考えられる。前者は、新しい語形(そのもの)に対するもので、「日本語の乱れ」として扱われる。例としては、「ガ行鼻濁音」や「ラ抜き言葉」や様々な新語形に対する非難が挙げられる。これら新形式の採用者は「日本語を乱す者」とみなされる。後者は、言葉遣いや敬語などより社会言語学的な問題であり、使うべき時に使わない、ふさわしくない、といった語用論的な視点からの非難だと言えるだろう。正しい使い方ができない場合は、「礼儀を知らない。」や、「女(男あるいは目下)のくせになんだ、その言葉(遣い)は。」などのそしりを受けることがある。さらに言葉に対する様々なバッシングには、単

にその言葉や言葉遣いそのものというよりは、むしろ「そのような言葉を使う人」を直接攻撃する側面があることを忘れてはならない。戦前の方言札がある種の個人攻撃であったことは言うまでもないが、現在も日常生活のレベルで人の話し方を真似て揶揄することがある。そのような行為は結果としてその人の発言自体を封じる可能性もある。先の「ネ・サ・ヨ追放運動」にもそういう側面があったことは否定できない。これらは、いずれも一般的には年配の比較的教養の高い層で、 prestigeの高いと思われる言語の使用者から、若い世代や prestigeの低いと思われる言語の使用者へ向けての非難である。

次にこれらのバッシングが起こる社会背景を考えてみよう。多くの場合、言葉に対するバッシングは、マスメディアがその言葉を取り上げることによって全国規模で起こる。しかし、その言葉が私的な場面で使われる分には、「面白い若者言葉」、「珍しい方言」などとして興味本位に扱われることはあっても、非難が及ぶことはあまりない。メディアが取り上げるのは主に公的な改まった場面において現れる新しい語形であることが多い。

ところで、この公的な改まった場面が一般の人に身近になったのは、長い日本語の言語生活史上から見ればごく最近である。そのような場で発言する機会が広く一般の人に開かれるのは第二次世界大戦後であっただろう。そのため柴田(1977a)も「日本語は、不特定多数を相手にことがらを説明するような話し方をいまだに模索中のように思われる。」と述べている。それまで多くの日本人は、くだけた場面で身近な人を相手に方言で会話できれば生活に支障はなかったものと考えられる。移動の自由が制限された身分制社会では、庶民は改まった場面に遭遇する機会もほとんどなかっただろう。また、「標準語」が教育されるようになってもしかたは、多くの国民にとっては、「沈黙」か「はい」と言うことだけが改まった場面での適切な言語行動であっただろう。極端な例だが江戸時代、直訴が死罪であったことや、上意下達式の軍国主義教育、さらに酒宴の際にのみ許される「無礼講」などの習慣を考えれば、「目下」のものが「目上」のものと対等に口を利く機会が今ほど身近にあったとは到底考えられない。公的場面での外来客や目上のものとの接触は、一部のエリート階層のある種の特権的役割であっただろう。

ところが、第二次世界大戦後は GHQ の指導で民主化政策が積極的に推し進められた。意思決定のために議会運営を行うこと、会議をすることが重視され、いわゆるパブリックスペースで発言することは「民主化」には欠かせないと考えられるようになった。戦後の国語教育でも聞くこと、話すことの指導が積極的に行なわれた。輿水(1956)が、「わが国の戦後の国語教育では、話し言葉の教育が相当強調された。教室で児童・生徒になにか発表させ、その話しぶりについていろいろと指導をした。そのために、「国語教育ではアナウンサーを作るのか」とか、「だから読み書きの基礎学力が低下するのだ」という非難を受けた。」と述べているほどである。また

その結果、10年もすると多く日本人が人前で話すことができるようになった。土岐他(1956)では颯田(国語審議会第2部会長)が「話しことばは第三期の国語審議会で作って見ましてね、とにかくたいへん良くなりつつありますね。」と述べているし、岩淵(1956)も「言語技術」という側面から、「話しかた・書きかたの技術が国語教育その他で取り上げられて、一般に話や文章がある程度上手になったことは認めてよいことであろう。少なくとも、昔のようにおし黙っている人が少なくなったことは、いわゆる民主主義的な考えや戦後の一般的な解放感に根ざすものであろうが、一面、この技術ということが考えられた上の成果と見られないこともない。」と述べている。また、上甲(1958)も「戦後の学校の生徒たちは、教室で話すという機会を戦前よりは多く与えられるようになったことは事実であり、その結果現在の生徒たちは、戦前の生徒たちほどには、話すことをおっくうがらなくなったことも、また事実である。」と述べている。

しかし、人々がようやく重い口を開き始めたところへ、早くも「アノー」や「エー」が耳障りだという非難の声が上がるのである。1956年9月号の『言語生活』(第60号)誌上の「国語審議会の建議と報告」でも実際「エー」、「アノー」が多いことが指摘されている。そして1950年代後半には先に見たように「ネ・サ・ヨ」も禁じられるようになる。さらに、寿岳(1979)によれば、当時農村では「オナゴは黙っとれ」という風潮がまだ色濃く残っていたようである。寿岳(1979, p.167-168)によれば、「15年ばかり前から私が出入りするようになった農村で…(中略)しばしばいわれることば、それは「オナゴは黙っとれ」であった。ある人は泣きながらこんな話しをしてくれた。」と述べ、「私が嫁に来たときは、便所ゆうたら、壁に額を押しあてて泣く場所やった。」という「証言」が紹介されている。言論の自由が保証されるようになったとは言っても、すべての人が何のためらいなく自由に人前で話しができるようになったとは言い難い状況である。

殊に女性について言えば、実際に社会進出が進み、公の場で声を上げるようになったのは高度成長が一段落した1970年代後半からだと言えるだろう。鹿野(2002)によれば、アメリカにおける「women's studies」が日本に「女性学」という新しい学問の誕生をもたらしたのも、「女性学の樹立に巨歩を印した」という水田珠枝の『女性解放思想の歩み』(1973)、『女性解放思想史』(1979)の出版も、1970年代である。この他、原(1992)でも言及したように、1970年後半以降、女性の社会進出を象徴する出来事が相次ぐ。国際婦人年である1975年には、「私つくる人、僕食べる人」という流行語を生んだテレビCMが、女性差別であるとして放送中止になった。また1980年には女性のための求人誌『とらば一ゆ』が創刊された。女性の社会進出に伴って、女性のマスメディアへの進出も盛んになる。当該イントネーション非難が起こるのは、「アイドル」と呼ばれる若い女性歌手の全盛時代とも重なるし、戦後生まれで、戦後の教育を受けた世代が社会で活躍し始める時期とも重なる。これまで男性がほとんどであった公的場面での発

言の機会を女性も獲得するようになった時期である。

また、発言の機会を得るというのは、当然女性が個人として自分の意見を主張するという、かつては考えられなかった事態が生じたということでもある。吉見(1995)は、明治30年代以降の電話交換手の女性化に端を発する規格化された声の複製化と女性の身体の資本主義的再編が、バスガイドやデパートの店員、企業の受付嬢、勧誘電話、案内電話などの(女性の)声の問題にも低通するはずだと、指摘している。実際女性の発言というのは概してマニュアルに従う範囲においてのみ歓迎される傾向が非常に強かったし、今もその傾向がまったくないとは言えない。「自分の考え」を筋道立てて述べ、しかも相手にもそれを聞かせるべく、相づちを打たせるなどは、よほど女らしからぬ、恥ずべきことだったと言ったら、過言であろうか。当該イントネーションがあれだけ感情的に嫌悪された理由は、慎み深くあるべき「若い女性」が使っていたからこそ、だったのではないだろうか。さらにこの文脈で考えれば、男性が使う分には問題がなかったわけだから、もし男性が使っていたとしても気付かれにくかった、ということも考えられる。川上(1956a)で既に指摘されているように「講演の際の昇降調」は音形としてはいわゆる「尻上がり」イントネーションと同じものであっても、非難されることはなかった。当時はまだ女性の講演者は極めてまれだったことであろう。

いずれにせよ当該イントネーション非難を全てその時代の社会的背景に還元することはできないが、全く無縁だとも言えないだろう。寿岳(1979, p.196)は「牝鶏時告ぐれば国滅ぶ」という諺を挙げ、「このことわざによってどれだけ多くの女が口封じをされてきたことであろう。」と述べている。当該イントネーション非難はある意味でこの諺と同じ役割を担ったものだとも言える。

先に述べた通り、言葉についての様々なバッシングは「口封じ」の効果もある。表立って「女は黙れ」と言えない中で、「話し方」を非難することは結果としてある程度、効果的な口封じになる。「ネ・サ・ヨ」にしろ、「アー、エー」にしろ、非難する側に明確にそのような意図があったとは言えない。しかし、相対的に社会的地位が高い層が、ある話し方や方言を否定的に扱えば、その圧力は無視し得ない。他人から言葉を笑われたり、注意されたことから暴力ざたを起こしたり、逆に自殺してしまったり、という事件は、「言葉」がいかに関人の存在と不可分であり、本質的であるかを物語っている。植民地における日本語の強制や、「方言撲滅」運動など苦い経験はまだ多くの日本人の記憶に残っているはずである。言葉バッシングの持つある種の構造的な暴力を自覚しなければ、新たな言論抑圧や言論封鎖も起こりかねない。知られていないだけで既に絶滅した方言・言語はこれまでにたくさんあっただろうが、幸い、子供も女性も話すことをやめなかったし、「ネ・サ・ヨ」も「アー、エー」も当該イントネーションも方言もまだ「絶滅」

はしていない。それらの言葉にはそれぞれの機能があり、また、その言葉を使わざるを得ない人と場面が存在するからだろう。

ここでは、当該イントネーションが主に「女性」の口調として非難を浴びた社会背景について考察した。これはあくまで推測であり、物的証拠は何もない。簡単に結論の出せる問題だとは考えていない。しかし当該イントネーションに対する非難にも、その他の言葉に関する様々なバッシングと共通の社会現象がある、ということは確かだろう。それは、発言の場が社会に開かれる過程で「新参話者」が発言するようになると、それを嫌い、それを恐れる守旧派層(プレステイジの高いと考えられる言語の話者、いわば既得権益者)の意図せざる様々な圧力が働くこともあるという現象である。当該イントネーション非難は、そのような圧力が、当時台頭しつつあった若い世代、特に女性へと向けられたものとしても捉えることもできるだろう。後を絶たない若い世代へ向けての言葉の非難や最近の新聞紙上(朝日新聞 2001年10月20日、同年12月29日など)で見られる「嫌言権」などという言葉には今後とも注意する必要があるだろう。

2-5. いわゆる「尻上がり」イントネーション現象から「話調」研究へ

本章ではいわゆる「尻上がり」イントネーションの音響的特徴、談話・文法上の機能、文体表示機能、それらに対する社会的な評価あるいはステレオタイプ、そしてその社会背景について述べてきた。当該イントネーションの音響上の特徴は、各種の俗称に反して「上がる」のではなく、小上昇後に大きな下降がある。実際は、発話の文法的、意味的切れ目を示し、まだ続くことを聞き手に教える機能に加え、聞き手の注目を集め、対話への積極参加を促す機能を持つと考えられる。若い層にとっては、場面の改まりの程度にはあまり関係なく、何かを説明する場面で使われる。もはや流行だからという理由で使っているのではない。一方当該イントネーションを使わない層は、当該イントネーションに流行語的側面を見出し、当該イントネーションの使用に異議を申し立てた。実際、当該イントネーションの使用者は「若い女性」に限らず、中高年の男女、若い男性にもいる。当該イントネーションが広がった背景には、日本語の中で改まった場で、何かを説明するようなときの話し方の型が確立していなかったという言語外的事情、及び当該イントネーションが他のイントネーションと区別する上で都合が良かったという言語内的な事情があったと考える。その上、「ネ・サ・ヨ」が禁止され、「アー、エー」なども嫌われたことも、当該イントネーションの積極的採用に拍車をかけたものと考えられる。

ところが、当該イントネーションには、先に述べたような実質的な機能や実際の使用状況とは違った意味付けがなされた時期があり、当該イントネーションを伴う発話は、「甘えた」、「幼